（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
全三十八年五月十五日發行統一第百廿二號毎月一回十五日）

御雛人形
附ぞく小道具

武者人形
東羽子板

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店
久月本店
中原福藏
（電話本局二千三百八十二番）

移轉廣告

本布教所左ニ移轉ス
神戸市兵庫塚本通四丁目廿三ノ卅八
顯本法華宗布教所
主田智量

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢　十二冊前金六十五錢　郵券代用は一割増但五厘切手を其とす
一講讀申込の節は住所姓名を除書にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振り込の事
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰毎一行金八錢なり

明治卅八年五月十五日印刷發行

發行人　井村恂也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木曄學
印刷所　北澤活版所
東京市淺草區南松山町四十五番地

發行行　統一團
東京市淺草區南松山町四十五番地

老か身はいつこの果にくつるとも
こゝろはすまん堀河の水

かとにたちもの乞ふ人の聲きかは
あはれと思へ施こさずとも

すゑいろく駒のあしから山こえて
不二をや後にかへりみるらん

日・仁・上・人

顯本法華宗管長本多日生師畧歴

慶應三年三月十三日兵庫縣姫路市坊主町に生る、明治十三年八月十五日總本山妙滿寺住職池田日昌に就て得度す、仝十六年四月二十二日教導職試驗に及第し成績優等を以て賞品を授與せらる、仝十七年九月十三日大阪府堺市妙滿寺住職となり、仝二十一年十月五日少學統に補せらる、仝二十二年一月二十一日宗制原案起草委員を命せられ、仝年三月十二日兵庫縣姫路市妙善寺住職に轉任す、仝年四月二日中學統に昇進し、仝年仝月七日公會議員に當選す、仝年七月十九日東京市淺草區永住町盛泰寺住職に轉任し、仝年八月三十日大學統に昇進す、仝年九月十七日東京市淺草區吉野町圓常寺住職となり、仝二十三年八月四日宗門要書取調委員長を命せらる、仝年十一月八日教務部長に任せられ、仝年仝月仝日評議員を辭す、仝年十二月二十五日權僧都に昇進し、仝二十四年四月十一日東京市淺草區新谷町慶印寺兼任住職を命せらる、仝年五月十八日依願教務部長を免せられ、仝年七月十五日慶印寺兼務を解かる、仝年十二月二十一日福嶋縣二本松町蓮華寺へ轉任を命せられ、仝二十五年一月十八日剝職處分を申渡さる、(當時前項轉任命令に對し病の爲め赴任し難きを以て醫師診斷書相添へ事情を管長に具伸せしに、何等の取調もなく突然剝職處分申渡書を郵送せらる、爾來專心布教に從事す)仝年十二月十七日東京市淺草區新福井町三番地に第一宗義布教所を新築し、仝二十六年二月二十七日岡山市內山下町に第二宗義布教所を新築す、仝年十一月十三日岡山縣美作國津山町に第三宗義布教所を新築し、仝二十七年十月十五日兵庫縣神戸市橋通二丁目に第四宗義布教所を開設す、仝二十八年四月十五日僧籍を復せられ權大學統に補せらる、仝年七月十八日巡回布教員に任せらる、仝年十月二十八日管長より宗義綱要の編纂を委囑せられ、仝年十一月十三日管長より宗名公稱に關する事務を委囑せらる、仝年十二月十六日大學林長に任せられ、仝二十九年二月六日僧都に叙せらる、仝年四月十三日監督布教師に任せられ、仝年十月二十日財務部長に任せらる、仝年十二月二十二日依願財務部長を免せられ法務部長に任せらる、仝三十年五月二十一日東京府住原郡品川町妙國寺住職に任せられ、仝三十一年七月十五日宗務總監兼法務部長に任せらる、仝三十二年三月十九日依願宗務總監兼法務部長を免せらる、仝年十月一日僧正に昇進す、仝三十三年三月十日內務省より顯本法華宗管長事務取扱を命せらる、仝三十四年六月十日管長事務取扱を辭す、仝三十五年五月十五日大僧正に叙せらる、仝年八月二十五日再び內務省より管長事務取扱を命せらる、仝三十八年五月十七日一宗公選に依り管長の職に就く

慶讃文

奉勸請　本門常住の聖衆來臨影響知見照覽あらせ給へ

本化沙門聖應院日生

明治三十八年五月十七日顯本法華宗管長の職位に就き茲に本日を卜して清淨の四衆と俱に本門の本尊の御前に跪き謹んで就職の式典を擧ぐ

恭しく案ずるに本佛釋迦牟尼世尊興世の一大事因緣は三五七九の迷衆を導きて唯一妙覺の大悟を開き三毒熾盛の熱惱を拂ひて四德具足の涼地に到らしむ衆盲一時に開き枯苗一齊に生くるものか

夫れ塵點久遠の大慈は發して八萬四千の口輪の應化を起し散じて三世十方の身輪の妙用を示す而も其歸趣する處一音の妙法は能く口輪の總持王にして如意の萬寶を包むが如く壽量の本佛は正しく身輪の統一主にして天月の萬水に映ずるに異ならず矣發迹顯本の三如來は

永く諸經に異り諸大乘經は三身相即無始の古佛を顯さず而るを佛滅後三國の人師執權執迹の見計に陷り父統の國に迷へるもの續出して佛敎の生命將に失却しさらんとす此時に於てや佛敎の法統亂れて廢の如く一大法將の崛起して再審統一の聖業を待つこと恰も大旱の雲霓を待つに似たり吾祖日蓮大士此時を膺り日東帝國に降誕し盛んに折伏の法鼓を擊ち以て權實本迹の正軌を顯彰し不惜身命の聖訓を實踐して法統を旣墜に回す眞に能滅衆生闇の讖言に酬ひ得たるものにあらずして何ぞや大士の聖業は外に附佛法の外道見を叱正するに止まらずして內に能く本門三祕の宗格を揭げて正法正義の歸趣を明にし萬法萬乘の正路を示す若夫れ法執我執を去つて大士の眞意法統の正流那邊にありやを窺はば其指敎眞に照々乎として日月の中空に懸るが如けん誰か復法統の嫡庶に惑ふものあらんや

大士の滅後法統紛亂の跡あるか如きは畢竟敎學曠廢して佛敎の大綱と本化の特長を意識するに由なく唯徒らに闇鬪盲動せしに依るが故なり此時に當り開祖日什正師超然として起り是等闇鬪盲動の者輩に誨ふるに經卷相承の傳燈法を以てし大に敎學の振興を促し給ふ是よ

りして復本化の法光宗門の中外に輝き爾來五百數十年の間法統の嫡庶に惑ふものなし矣日什正師の仰に曰く同器用の者打替り打替り帝都の弘通を勵むべしと又曰く經文御書の如く改悔ありて弘通あらば隨身致すべしとあゝ何ぞ其襟度の光風霽月なる彼等我執の徒若是をきかば愧死するとも尙足らず矣

夫れ宗義宗旨の宗門敎團に於けるや恰も吾人の精神と肉躰との關係に酷似す吾人は完全なる性能の發揮に努むると同時に健全なる肉躰の攝生を要するが如く亦宗義宗旨の正明なる發揚を期すると俱に宗門敎團の健全なる發達を圖らずんばあらず今や不肖日生宗門の推す處となり一宗管長の職に就く固より其の器にあらざるべしと雖も幸に佛祖遺訓の在るあり法統の正流を汲み得て淸淨の四衆と共に誓つて宗義宗旨の正明なる發揚と宗門敎團の健全なる發達とを期せんとす伏して冀くは三寶諸天の冥に助護を垂れ給ふて所願成辨の曉に達せんことを

茲に淸淨の四衆と共に本門の本尊の御前に跪き一心淸淨に吾が法統と吾が敎團とを慶讚し上る哀愍納受あらせ給へ　稽首　稽首

祝勝の辞

露國全力を擧げ、我國亦全力を盡して、互に雌雄を決す、奮鬪數日、凝視すれば前に威風堂々として四邊を壓せし物は今や那邊にか去にけん、波艦隊半歳の艱苦健鬪は實に我功名をして益々大ならしめしに過ぎず、露國上下の囑望は誠に我威名をして更に輝かしめしに過ぎずして、日本海上風濤荒く、慘憺たる蒼波は轉た悲哀を語る。然り實に我帝國は有史以來未曾有の一大海戰を戰ひ、有史以來未曾有の一大勝利を博し得たるものにして、サラミス、トラズルガーも遠く及ばず、吾人は史を繙く毎に轉た感涙の滂沱として双頰に流るゝを禁め得ざる者なり。曾てサラミスに次では希臘全盛のペリクリアン時代を生み、トラフルガーを受けては英國雄飛の一大海上王を生じぬ。歴史は死せる空文を連ぬる者に非ずして、實に活躍する一大眞理の汪流せるものなり、吾人はサラミスを懷ひネルソンを想ふと共に今茲に有史以來未曾有の一大新帝國勃興の機運を否む事能はず、活氣充溢せる千歳一遇の時代を謳歌せざるを得ずして、吾人は大に此の大戰勝を祝し、吾人は大に此の大帝國を迎へざるべからず。吾人は宗教家としての聖き天職を帶び、吾人は日蓮門徒としての大なる活氣を有す、吾人は此の大海戰を紀念し、此の大海戰を完成すべく、茲に一大紀念碑建設の大業を企てんと欲する者なり。元よりこの大戰にふさはしき大紀念碑にして、そは石に刻すべからず、木に彫るべからず、刀槌筆硯の死せる產物を拒けて、吾人はこの大紀念碑を國民活動の靈と力とによりて建設せんと欲し、國民凡てがこの大機運と大天職とを自覺し自認して、各其の職分に從つて應分の寄進を致さん事を欲する者なり。實に我神武神功の末裔は凡てこの聖業に應分の寄進を致さゞるべからず、或は大政活家となりて國政を料理するも可なり、或は大教育家となりて國民を訓育するも可なり、或は大詩人となりて活躍たる時代を謳歌するも亦可なり、其の形式の如きは元より問ふ所に非ずして、吾人は唯我同胞に寄進すべく誓願せよとすゝむる者なり、大帝國の中堅たるべく覺悟を定めよと絶叫する者なり、寶の山に入りて手を空しうするなくこのあいがたき大機運に際會して袖手傍觀する勿れと、誡むる者なり。劒と武士との將に休養せんとするに當りて、靈と教徒との任務は之より益々大ならんとす、或は戰勝に醉へる匹夫を警め、或は戰勝に伴へる淫風を鞭ち、或は又大精神と大活氣とを鼓吹し、怒號して、半夢半醒の同胞國民を活かすが如きは、凡てこれ吾人宗教家と、吾人日蓮門徒との天職にして、又紀念碑寄進の一分に適ふものと云つべきか。聊か感慨を述べて以て祝勝の辞に代ふ。

日蓮上人の宗義及系統

本多日生講述
古定賢正筆受

各論　第三章　佛陀論

第四節　法身爲本と應身常住との別

天台三身の解釋

金光明經文句に曰く佛本無レ身亦無二於壽一隨二順世間一而論二三身一亦隨二順世間一而論二三壽量一法身者師軌二法性一還以二法性一爲身此身非二色質一亦非二心智一非三陰界入之所二攝持一强指二法性一爲二法身一爾法性壽者非二報得命根一亦無二連持一强指二不遷不變一名レ之爲レ壽此壽非二長量一亦非二短量一無レ延無レ促强指二法界一同二虛空量一此即非身之身無壽之壽不量之量也と即ち初段は法身爲本論に結着すべき天台の所說にして約して之を云へば彼は先づ元來佛には身なく人格なく從つて其の壽命も存在せざれども但俗諦に應用する時にのみ三身三壽量の論を生ずるなりと論斷しれきて更に進んで三身の解釋に入りたり則ち法身の法とは宇宙の法爾自然に具れる無形の眞理なる法性眞如に軌りて違はざるを指す者にして眞理の强て具体化せんとするを名けて身と云ひしなりされば身とは積聚の義にして人格の体をさすに非ず天則の結晶眞理の權化とも稱すべく色質にも非ず心智にも非ず五陰十八界の感覺と離れ全く冷かなるには非れども兎に角無形の眞理なり從つて法性法身如來の壽命も亦功德に報ひて獲得せられたる果報に非ず吾人の生命の如く精神の連續を云ふにも非ずして唯眞理本然の性質たる不變不改を指し强て之を名けて壽と云ひしなり故に壽量とは無始無終の生命にして長ども短とも名け難く延て長からず縮で短にあらずもし强て譬をとらは虛空の絶對無相の如きに比すべきか　大略此の如き說なるが之に依りて彼の法身常住論は諸宗に普通のものなる事を見るべく是位の議論を尊しとするは未だ權大乘の賤見を脫せざる者と云ふべし尙最後に彼は定義を下して法身の身は非身之身なり法身の壽は無壽の壽なり法身の量は虛空大の不量の量なりと云ひしが之の定義は佛陀觀の規矩として以て諸說の混亂を避るに足らんか

又報身につきては

報身者修行之所感也法華云久修レ業所レ得大般涅槃修レ道得故如々智照二如々境一菩提智惠與二法性一相應相冥相應者如二函蓋相應一也相冥者如二水乳相冥一也法身非レ身非二不身一智旣應冥亦非レ身非二不身一强名二此智一爲二報身一也法壽非レ常非二無常一智旣應冥亦非レ常非二無常一强名レ常爲レ壽也法旣非レ量非二無量一智旣應冥亦非レ量非二無量一强名二無量一爲レ量也

と報とは菩薩の修行に報ひし德即ち感報にして法華に久

修レ業所レ得と云ひ大般涅槃に修道得故と云ふ者は即ち此の意なり其の狀態は不變平等の眞如の如理と合体せる智慧が眞實と合体せる境界を照す即ち眞理を覺り上げたる智を以て其の眞理を照せるなり此の智を指して報身と云ふ菩提智とは無上覺無上道と譯すされば報身とは境智冥合して相應し相冥せる事譬へば函と蓋とが相合し水と乳とが混入して何れをうれと分ちがたきが如き有樣を云ふなり而して法身は前陳の如く非レ身非二不身一眞理人格何れにも屬せざる過渡時代のものなるが從つて之に應冥せる報身の智慧も亦非レ身非二不身一強て此の法身の理に契合せる智慧を指して報身と云へるなり又法身の壽は非常非無常のものなるが從つて之に契合せる報身の壽も亦非常非無常なるべく唯其の常住の半面をのみとりて強て報身を常住と名けしなり又量に就ても同樣に法身の非量非無量と契合せる報身の非量非無量中唯其の無量の半面をのみとり強て之を報身の量となすなりと以上の說明は自受用報身に當れり、次に應身につきては

應身者應同物身爲レ身也應同連爲レ壽也應同長短爲レ量也智與レ体冥能起二大用一如下水銀和二眞金一能塗中諸色像上處々應現往能爲レ身爲二非身一能爲二常壽一爲二無常壽一能爲二無量一爲二有量一

と即ち應とは物に應同せるの意にして人類を敎化するには之に隨順し之と同形を具へ人身となりて現るゝなりされば此の場合の身とは明に人格を意味すれども又無色界の物を敎化するには彼に隨應し順隨して色質を具へずして非身を示す事もあるなり但この際の非身とは無色界に應同せしによるが故に應身の人格的本質に就ては些の變易する所なきなり次に又壽及量に就ても敎化すべきものゝ壽量に應同して八十入滅及丈六有限の壽量を示すと雖も相手が常住無量なる時には應身の壽量も亦隨つて常住無量となるなりと即ち應身に關しても非身と常住と無量とを說けるなりこの點大に着目すべし要するに報身の智が法性の理と合体して此に一大活動を起し來れる應用が即ち應身にして活動的化他的の佛陀なること譬へば水銀の功德を法性眞理の眞金に和してそこに救濟の力を生じ衆生の機緣に應じて諸の色像に塗るが如くに處々に應現し相手に隨つて身壽量を定め之を救濟するなりとし更に結論として

此三身三壽三量不レ可二竝別一一異則乖二法体一即レ一而三即レ三而一乃會二玄文一

と說き法報應三身隔歷の偏見を破斥して彼の橫に三身を並べ別異を見る者も又堅に三身を說て差別を立る者も共に不可なり三身の關係は恰も摩醯修羅面上の三目の如く伊字の三點の如くにして即一而三即三而一なりとしこの關係を說かんが爲に如來壽量品と題したりとは天台の金光明經の如來壽量品に對する解釋なりとす

尙此說明に對照して參考とすべきは法華文句九の卷金光明經

玄義一の卷等なり法華文句九の二十四丁には法身命は如理なり報身命は如々智なり應身の命は同緣なりと說て法身の生命とは眞如の妙理なり報身の智とは如理に合体せる智慧なり應身の生命とは機緣に應同する事なりとし智を分ちて理に向ふ自覺の智と敎化に向ふ覺他の智の二ありとし更に三身相即の見地より理智悲を打て一丸となせり又大經の三譬を上げて

於二諸常中一虛空第一一切壽命中如來第一

法身如虛空

此譬二法身壽命無始無終性相凝湛不レ同二報應一。

之を第一の譬となす宇宙幾多の物体中其の最も不變不易にして又尤も確實なるは虛空なり之を以て法身の不變と確實とにたとへ法身の壽命は無始無終にして其の性相は湛然平等不改なる事恰も虛空の眞に常住なるが如きなりと云ひ次に

譬如二四河皆歸二大海一此譬二報身所レ修萬善皆報身如大海

國二佛報壽命海中一

との第二の譬を上ぐ即ち報身所修の萬善が凡て佛の壽命中に現れ來る事恰も四大河の皆悉く海に集るが如きにたとへたるなりいかに佛の慈悲智慧の無限ならんともし其の生命にして八十才有限のものならば何の甲斐もなかるべく報身の功德活動は凡て其の壽命の海中にありて初めて用をなせるなり之を報身佛の有樣とすと云ひ終に第三の譬として

譬阿耨達池出二四大河一此應身壽命上從二法報一應身如四大河

應二同他長短一

と云へり阿耨達の大池より四大海の流出するが如く法報の理智より應身の壽命が發動し諸の機緣に應じて種々の救濟をなす之を應身の狀態となすなりと以上は法華文句の三譬の大要なるが此の三身に於ける一往の定義は適當なりと云ふべし以上の說明にて大畧天台三身の解釋は明白ならんも尙藏通別圓三身の見方を對照するを要す

金光明經玄義一の卷に曰く

料二簡三身一者若取二樹王下佛一爲二眞身一神通變化猿猴鹿馬爲二應身一不レ明二三身一者此小乘折法意爾

之を藏敎の佛身觀とす此は前節に於て說明したる所なり折法とは折空觀にして萬有を折破すれば空なりとの議論なり俱舍成實等之に屬す次に通敎は

若取二即事爾眞一爲二眞身一化用爲二應身一不レ明二三身一者此体法中意爾

なりとせり即事爾眞とは萬有の現象實在を說くものにして萬有事物を捨てゝ眞如法性は存するに非ず事相がその儘に實在なりとし之を以て直に眞の佛陀なりとなす禪家の所謂庭前の柏樹子云々の所說は之の類に屬する者なり体法とは体空觀にして萬有の現象即空なりとなす本來無一物の見なり又別敎は

法身眞實二身不二眞實一此即三身体相各異即是別敎

中一途非二今所用一

と別敎にては三身を立つれども隔歷の見地に坐して報應の二

身は眞實の理に非ずとなす此の如は今の談にあらずして不用の義なりと念佛華嚴密等の大乘にても三身の相即は說かざるにあらざるも實際には彌陀大日舍那を尊んで釋迦を下すが故に別敎隔歷の見に墮せるものなり尙此の事は後に詳論せん

次に圓敎は

若言三身皆眞實至理是法身　契理之智是報身　起用是應身

三身皆實者是今所用

となせり圓敎にては三身を立るのみならず三身何れも眞實なりと主張す即ち法とは理に報とは智慧に應とは起用に名けしものに過ぎずして本質は三者同一体不可離の者なりとなす

以上は天台三身の解釋なり

隔歷三身の說

此說は別敎一途の見方なるが別敎といへば久しき以前より輕蔑せられ居る敎なるが故之を脈ふて圓敎と自稱し表に相即を語るもの多しと雖も既に彌陀大日舍那等を本尊とせる以上は彼等はすべて別敎同斷なりといひて可なり法華文句九卷廿一丁に曰く

是三如來若單取則不可也大經云（南本二卷七十二丁哀歎品）法身亦非般若亦非解脫亦非三法具足稱秘密藏名大涅槃不可一異縱橫並別圓備三法稱假名如來也法報應三如來中若其一を採れば不可なり涅槃經には法身を是なりとして是を採るものも般若報身をよしとして之をとるものも解脫の應身を可なりとするものも總て不可なり是等の三身を具足するを始めて秘密藏と稱し大涅槃と名くと說けり尤も留意すべき厚訓にして縱の時間的の見方も橫の空間的の見方も三身を並べて別なりと見るものも總て不可なり三身の關係伊字の三點の如く一佛の活動の方面に依て異なれりと見るにすぎず梵網經に所謂大乘の佛は本來不可離なりと批評せるは適切の語といふべし傳敎の影向の軌摸を亡すといふものも亦此意なり大釋迦と小釋迦とを離すは絕待的に不可なりとす

次に天台は亦涅槃經の像法決疑經を引いて釋迦を色々に異なれりと見るを不可なりとして蓋前緣異見非佛三也といへり是佛を見るに或は丈六の小釋迦と見又は盧舍那の大釋迦と見るは皆機緣の前の異見にして其佛の本体に就て別異あらずといふ意なり又觀普賢經の釋迦牟尼佛名毘盧舍那遍一切處の文を引き釋迦と毘盧と一体なるも而も亦非一異明といへり即ち釋迦大日異名同体なりと雖も又其名を異にせる以上は單なる一釋迦にあらざること明にして其活動の上に諸種の別ありとの意なり

更に同書二十二丁には此意を述べて發迹顯本三如來永異諸經といへり永異諸經とは他家の三如來は寂塲以下の說にして久遠以來の法華の說と異なれり他經は佛を衆生と見て說くが故に三身を立つると雖も三身の網格が不明にして不可なり發迹顯本の三如來とは彌陀も大日もなく唯久遠の本

佛のみ存して本覺の上より活動し來りて印度に降誕したりと說くものなり此天台の說は大に敬服すべきことなりとす、尙次に日蓮上人の烈しき隔歷三身破却の說を紹介して天台の所論を補はんに錄內三十五法華眞言勝劣抄に曰く

諸經は始成正覺の旨を談じて三身相即無始の古佛を顯さず本無今有の失あれば大日經の如來は有名無實也壽量品に此旨を顯す釋尊は天の一月諸佛菩薩は萬水に浮べる影と見へたり

と即ち諸經は三身の立脚地が寂塲以下なるが故に隔歷の見をもち衆生の誤りに陷れるものにして今日の釋尊は無始の古佛なりとの顯本の見地より見ざれば到底眞の佛陀を認識する能はざる也又本無今有とは中間より物が加はりしとの考にして本來の實在にあらずとの說なるが中途より釋尊に少しばかりの智慧が加はりしといふは非眞理なりといはざる可らず本有無始の釋尊は天の一月にして諸佛菩薩は萬水に浮べる影の如し今日の靈山の釋尊は過去無始に溯り未來無終に亘りて盡十方に活動せる中心にして靈山の釋迦が即ち眞の本佛なりとの積極的統一主義を唱導せられたるなり

尙上人は大日經等の諸大乘經の無始無終は三身の無始無終にあらざるなりといへり隔歷の見を斥け眞言淨土等の僻見を打破せられたること是に依ても明けし

三身相即の說

此說だけにては天台日蓮の間に大なる相違なきも唯其中心を定むるに到つて始めて法身爲本と應身爲本との差別を生ずるなり

概して云は別敎は隔歷說也圓敎は相即說なりとは天台の意見なるが三身相即說は單に法華經のみに限らずして金光明經等にも存在すれども一方は寂塲以下の說にして法華經の三如來は久遠以來の佛陀なり而して天台は中間以下の佛陀をとりしに反對して日蓮上人は久遠無始の三身をとれり天台は無始の三身を衆生の色心業に約して立たり此は未修顯の三身にして發迹顯本の三如來にあらず最初成道の三如來也故に五百塵點劫の限量を存す天台は一面に無始の實在をとくが如きも其際には未修顯の如來となり又人格の佛陀を說く時には五百塵點劫有限の失に陷れり然れども日蓮上人は無始の三身相即說なり時としては天台の如く迷へる衆生に約して之を說くことありと雖もうは天台附隨の說なり（御義口傳內廿七等）誠に日蓮の無始三身論なるものは修顯の應身論三の三身相即論にして人格實在をとれるなり

以上にて三身相即論の大躰は明かならんが以下天台の典據を少しく擧げん文句九卷三十一丁

經如來秘密神通之力　釋秘密者一身即三身名爲秘三身即一身名爲密又昔所不說名爲秘唯佛自知名爲密神通之力者三身之用也神是天然不動之理即法性身也通

是無窒不思議意即報身也力是幹用自在即應身也佛於三世等有三身於諸經中秘之不傳故一切世間天人修羅謂今佛於道場得此三身故執近以疑遠弘法も此經文に依て佛陀觀を說明して入眞言門なりとまでいへり以て此經文の如何に重大なるかを知るべし

体用に分て佛を說明すれば天台は体の三身に入り日蓮は用の三身に入れり天台は靜の方面をとるが故に法身論三となり日蓮は動の方面に依るが故に應身爲本となれり先に擧げたる經釋の始の一句は一にして即三三にして即一なるを佛の本体なりとしき次の二句は此を經に約して判せしなり此の如き三身相即の廣大なる佛陀觀はいまだ壽量品以前には說かれざる所にして体に約すると說法に約するとよりして秘と密との別あるなり以下神通之力までは用の方面をときしものにして此の如き眞理と智慧と活動との三が具足して働けるを稱して神通之力と經に說きしなりとし次に結論として法華以前の圓教を破斥し其道樹以下の佛をとるを斥けたり茲に着眼すべきは三一不離の關係即ち圓融相即の說明と單なる一を許さゞる點となり又金光明經の文句に曰く此三身三壽三量不可並別一異則乖法体即一而三即三即一乃會玄文と說けり

次に日蓮上人獨特の相即說を見んに內三十五法華眞言勝劣抄に曰く諸大乘經には三身相即無始の古佛を顯さずと爾前の圓は道樹以下の三身論天台の圓は最初爲本の三身論にして日蓮上人の無始實在の相即說とは大に異なれること此文に依れば明なり無始古佛の一句至大の注意を拂ふべし又本尊抄には五百塵點劫乃至所顯の古佛なりとあり所顯の文字天台の五百塵點說と對比して大に味ふべし若上人の無作三身說にして未修顯の衆生に約せる無作三身說なりとせばうは天台に於ても權教に於ても均しく唱導せる處にして上人獨特の敎義は實に絕滅せらるゝに至らんか無始古佛の一句大いに味ふべし

尙一言すべきは村上氏は佛陀論に於て向下的佛陀論と向上的佛陀論とを區別し向下的とは最初に法身報身あり之が下に向つて顯れしが釋迦にして大日彌陀を本佛となし釋迦を以て末佛迹佛なりとなすもの向上的とは始めに釋迦を認め之より溯つて報身法身に達するものにして氏は後の說に左袒し釋迦を中心として法報の大日彌陀は釋迦の研究より發展せしものとなせり此議論は一見卓說なるが如くなるも要するに五十步百步の失を脫する能はず研究の結果彌陀大日に達せしは一段の進步にして大に可なりとなすが故に矢張隔歷の僻見に墮せるなりされば彼は口に釋迦を中心となすと雖も實に其信仰に到りては彌陀を本尊とせるにあらずや台當二家の相即論は斯の如き曖昧なるものにあらずして向上向下を問はず絕待的に相即論なり思想は上下を屢々繰り返すものにして圓融無礙なる上より相即論を起し從劣說勝的に釋迦中心の三身論をとけるなりされば開日抄には四十餘年の釋尊十劫百劫の諸

佛を分身と說かると示し給へり尙此事に關しては應身實在の眞意義をしらざれば其妙旨を解しがたかるべし

法身爲本の大要

今まで述べ來りし如く天台は三身相即をとけども而も彼は法身爲本に陷れり或は天台は報身爲本なりとなす者あれども是は大なる誤謬にして學者の大に注意すべき點なり先づ始めに報身說をとるものゝ說を擧げんに文句九卷二十七丁に曰く

詮量通明三身者從別異正在報身何以故義便文會義便報身知慧上冥下契三身宛足故云義便文會者我實成佛以來甚大久遠故能三世利益衆生所成法身能成即報身法報合故能益物故云文會以之推之正意是論報身佛功德也

とあり正在報身の文明白なるが故に法身爲本といふは不可なりとなすものあれども義便文會の二故の理由に依りてたとへ正在報身といふとも而も本源に歸つて之を見れば法身爲本なりとせざる可らず又金光明經文句に曰く佛本無身無壽亦無於量隨順世間論三身と即ち佛の本体は無身無壽無量にして法身的なれども世間に應同する上より三身の說を生せしなりと說けるなり此事は文會と義便と二つの理由より生ず尙法華玄義八の卷二十四丁を參照すべし曰く

如三軌成乘不縱不橫不即不離顯示義便須簡觀照等唯指眞性當名正意分明三軌既然餘法例然

三軌とは眞性觀照資成の三なり眞性とは眞如法性の如理にして一切現象の根本なり此は法身如來に相當す觀照とは觀念にて眞理を照せしものにして佛の悟をいふなり報身如來に相當す資成とは此悟を資けて成せしめしものにして菩薩の行なり此は應身如來に相當す三軌は類通三法の一なるが類通三法とは玄義五に十乘を擧げたり曰く三道三識三佛性三般若三菩提三軌三身三涅槃三寶三德なり即ち三軌の中に於て眞性軌が本となるが如く他の三法に於ても其最初のものが本となり居り而も既に眞性軌が本なれば是法身が本たるなり茲を以て思に天台は法身を本としたることや明かにして報身を本としたりと思が如きは畢竟天台の研究が根本的に進まざるの致す處にして天台の最奧は毘盧の一本即ち法身如來を以て其根據としたりしなりされば玄義七には過去をも中間をも今日をも總て最初爲本なりとして三世即ち異なれども毘盧舍那の一本は異ならずと說けり彼は如何に佛陀を說明するとも終に實相の妙理に歸せり彼等の觀念の對境は不可思議境にして佛を念ずるは單なる助行にすぎず四種止觀俱に其佛を異にするが如きは彼の法身爲本論なるを示せる爭ふべからざる證據ならんか

應身常住の妙旨

此議論は正しく日蓮上人が佛陀觀上獨特の所論なれども天台既に其密意を漏せり然るに從來の日宗學徒はあはれにも天台

の應身常住の說をだに知悉せずして無謀にも應身とは無常に定まれるものなりと獨斷せるもの甚だ多し故に予は先づ天台の應身常住說を述べんに文句九の卷二十四丁には應同緣緣長同長緣促同促とあり緣長同長の四字注意せざる可らず無邊の衆生を救濟せむとするが佛陀の慈悲にして佛と凡夫との緣は永久に盡くることあらざるなり唯一小部分に就てのみ觀察するが故に或は緣盡きたりと思ふとあれども少しく眼界を廣くして思を宇宙法界に寄する時は衆生を救濟せむとする應身如來は必ず常住の佛ならざる可ず此事は尙金光明經文句二の能爲常爲無常との文を對比して知べし以上は天台の所論なるが日蓮上人に到りては更に一段の光彩を放てり上人の應身論三は体用の上にては用の佛を起點としてとき緣起論の上にては佛界緣起論を基礎として說明し實相論の上にては十界事常住を以て本体とせり即ち上人は起用の如來を根本とせし者なり又神通之力の文より解釋をすゝめ神通の中には三輪の神通をとき自他の中にては化他的の如來をとり化他即自行なりと稱し衆生敎化の爲に身に三輪の活動せるなりとせり經に所作佛事未曾暫廢とあり所作活動の佛をとり給へるなり又智悲の中に就ては慈悲爲正の如來をとり每自作是念の如來をとれり念とは慈念なり如何令衆生の大慈大悲の慈念にして慈悲圓滿の佛陀をとり給へるなり又上人は主師親の中に於ては力づよき主と智慧をとく師匠とを斥けて溫かき慈悲を以て吾人を救濟せむとしたまへる父上としての佛を見たまへり又人格非人格に就ては絕待的に非人格の佛を斥け人格實在の如來をとり給へり經に曰く莊嚴法身と又種々寶莊嚴と上人は此莊嚴人格の如來をとり給ひしなり遺書中此意義の尤も明白に現れたるは開目抄なりとす曰く諸大乘經は法身の無始無終はとけども報身應身の無始無終はとかずと類似の文他に存せりと雖も確に此一文は上人の眞精神をこめたるものと見るべきなり

尙應身常住論は分身論と對照して研究せざる可らず此點は法華獨特の廣大なる所以なり寶塔品を參照せよ法華眞言勝劣抄には伽耶始成をやぶりたる五百塵點と說き今日の釋迦をとらへて直ちに三世實在の應身佛が今玆に現れ居れるなりとし時間に於ては三世空間に於ては盡十方の分身佛の中心が即ち此釋迦なりと主張したまへり又本尊抄には我本行菩薩道の文を解釋するに當りて天台の所說を斥けて我本行菩薩道とは佛界所具の九界なりと宣へり此解釋は經文に對しては或は不穩當の失あるやも計りがたしと雖も其不穩當なるが大に注目し大に研究すべき大問題にして我本行菩薩道も佛界活動の上の一面なりとせる從果向因的の議論より此解釋を下したまひしならん釋の當不當に就ては他日經典の解釋をなすに當て論述することあるべし尙什師の議論を擧げんに師は壽量品を釋して曰く宣三身即一應用顯塵點久遠大悲とあり應身常住慈悲中心

論なること明かなり又受師は三身即一の應身化他利物の佛界緣起の法門なりと說けり確に我宗の生命をいひ現したるものといふべし

應身常住說に對する辯妄

此議論に對して反對說を爲すものあり

(1)應身無常の見は上來述べ來りし如く此說は權敎の淺見にすぎずして辯妄の價値なし

(2)日向記の應身說を引て表に贊同を示しつゝ陰に此說の妙旨を奪ひさるものあり日向記四十六丁に曰く「仰云釋云凡夫亦得三身之本矣此本字應身事也されば本地無作本覺の体は無作應身を以て本とせり尙我等凡夫也應身は應身佛也「其上壽量品之題目を唱へ奉るは眞實に應身の如來の慈悲也とあり開目抄にては尙報應何れが爲本なるや分明ならざれども日向記に到つては明白に應身爲本の典據あり之に依て上人の應身爲本論なることを知り得べしとなして大に贊同を表するものありと雖もこゝにいふ應身とは人格實在の佛にあらずして彼凡夫三身即一論中の應身爲本論なり發迹顯本の應身爲本論とは大に其格を異にす其上壽量品以下の文は客体的に佛意を受くるものとなれるものにして三身爲正論には關係なし故に此文は開目抄と類似の文なれども應身爲本論にあらず尙應身爲正論より眞言の大日淨土の彌陀等は悉皆破却しさるべしと雖も時間足らざれば略す

最後に淨土敎以外に慈悲の如來をとくものなしと甚だしき獨斷を村上氏は下せしが此に就て一言せん同じく慈悲をとくと雖も淨土門の慈悲の如來は唯機緣の前の慈悲なり日蓮上人の根本的大慈悲と大に異なれり上人のは機根劣り罪深きが故に慈悲あるにあらずして等覺に對するも乘に對するも又人天地獄に對するも總て同樣に根本的慈悲の佛なるなり又念佛宗の佛は十劫有限の慈悲にして其佛陀も眞の實在者にあらざれども上人のは常住不變の大慈悲を有し化益も又廣大極りなきものなり要するに日蓮上人の主張せられし應身如來は三世盡十方に亘れる絕待的廣大無邊の慈悲の佛にして之を淨土家の彌陀と或は混同し或は見下すは非常なる誤解といはざる可らず

懺悔錄（三）

野茨花生

三

余をして乾涸なる止觀の問題に入るを止めて、暫く時代の弊風に痛罵慷慨の涙を流しめよ。

淫風滔々乎として天に滿ち地に溢れ、病的の青年、放恣の男女、或は無意義の煩悶に苦ひあり、或は價値なき情思に溺るゝあり。世は駄小說と駄演劇と駄書葉書と、星と菫と、戀と肉とに蔽はれて、思潮流れて一の歸趣なく、時代作られて一の秩序なし。嗚呼社會は腐れ果て、世態は蕩れ盡しぬ。止なん哉、止なん哉、純潔義烈の古武士の風、泰然不動の古聖

僧の流、今や實に之を求むるにうの所なきなり。

人にして若し情のみの生涯を送り得べきならば知らず、人にしてもし反省なき歳月を過し得べきならば知らず、苟も世に死滅の存し、苟も世に宗教の生命ある限は、此の如き青年と、此の如き時代とは、奚ぞ一度大反省大懊惱を免るゝ事を得んや。來れ、三文詩人よ、卿等は戀のみを以て人の全体なりと思ふか、來れ、菫を語る婦女よ、汝等は青白き青年をのみ全き人格なりと思惟するか。文を賣る者よ、須く時代に阿る事を止めて何ぞ疾く清貧に飢ゑざる、風潮に動く者よ、何故疾にく永へに宇宙を主宰し給へる大慈悲大勢力に接して汝の腐觸を抉らざる。滿天下よ、一の反省をも、一の懺悔をも有せざる人臭き滿天下よ、奚ぞ疾く醒めて汝の罪惡と汝の汚穢とに恥ぢ、大に懺悔し大に改恨して速に眞面目なる生涯に入らざる。地獄は脚下眼前に横りて卿等の來るに紅蓮白蓮の業火を準備せるぞ、見ゑざるが故に恐れず、觸れざるが故に信ぜずとなすか、卿等は僅に數日の斷食、數月の禁錮にすら恐れ慄くに非ずや。卿等は實に金や權力にすら頭を下げ、卿等は實に區々たる失戀にすら泣き叫び、惱み狂ふに非ずや。汝迷へる者よ。何が故に少しく思を三世によせ、心を十方に走せて、宇宙の眞理に背ける生存の如何に恐しく、宇宙の大慈悲と離れたる生涯の如何に危險なるかを悟らざる。數日の斷食にすら死なん計りなる卿等、若し無間大城に墮ちなば如何にしてかよく分秒をだに過し得べしと想ふ哉。價値なき少女を失ふてすら全世界を奪はれ果てたらん如くにあわて騒ぐ卿等、若し大覺世尊の慈悲惠光に離れ奉りなば、如何にしてかよく心の寂寥を抑へ得べしとなす哉。醒めよ、醒めよ。今さめずんばいつの日が再び信仰に入るを得べき。食を得ざるは唯生命を失ふに止れども、信仰を得ずんば靈と未來とを亡すなり、金を得ず名譽を得ざるは唯現世に人に嗤はるゝに過ぎざれども、善を積まず慈悲に救はれずんば三世に佛神に捨てらるゝなり。醒めよ、醒めよ。一の反省をも一の懺悔をもせざる人臭き滿天下よ。疾くさめて汝の放恣淫逸なる生涯を佛前に發露せよ

* * * * * *

「蝶々、蝶々、菜の葉にとまれ
菜の葉がいやなら、坊の手にとまれ」

と、如何に其の調の靜にして、何ぞ其の想の清き。吾はこの歌を懷ふ毎に、曾て故郷の野邊に蝶を追ひ菜花にあこがれ、菫を摘みては角力を取らせ、蘗菜を束ねては蛙を釣り、河原に立ちては地藏尊の頸はねぬる昔の罪なき吾を忍ばざる事なし。嗚呼かの折の吾!!、罪なく穢なく。世を知らず人を解せざりし無垢清淨のかの折の吾よ!!。かくまで墮落しかくまで濁り果てなんと露計りも豫想したらんには吾はとく死に果てたりしものを。悔みても、悔みても、吾は今迄徒に世に長らへし事の慨抑へ難くなんある。

おゝ汝正義に誇る者よ、汝博愛を衒ふ者よ。汝は一度吾が罪を憐んで吾に同情し、汝は再度吾が罪を厭ふて吾を捨て去んぬ。おゝ汝僞善者よ!!、汝はその心を誇り、汝はその正義を尊ぶ。吾を捨てたるは穢はしとてか、吾を捨てたるは救ひ難しとてか。吾とても曾て一度は無垢清淨の時代もあり、吾とても曾て一度は佛神の愛子なりつる折もありき。何故に吾を捨てたる?。過失多き人生に處して而もかくまで潔癖なる程正しき生涯を送れりと汝は思ふか、汝自覺せざるものよ、汝罪を覺らざるものよ。汝若しうの罪業とその過去とに想倒し來らば、少しにても罪を悔み罪を脱せんともがける吾を捨つる事を得ん哉、汝は未だ罪を自覺せざるものなり、汝は未だ迷に沈める者なり、汝增上慢の輩よ!!、汝の誇り汝の尊し、とするは泥と糞とを比較すればなり、汝若し誠の正義と誠の慈悲とに接せば必ずや泣いてうの臭汚を痛恨すべけんか。曾て暫時にても汝は混亂を避け得たる事ありや。汝の誇り汝の尊ぶ所は夢幻の妄想に過ぎず、汝は五十歩百歩の謬見に坐して誇るべからざる事を誇り改むべき事を改めず、佛を蔑し法を輕んせるものなり。正義とは汝位の境涯を云ふに非ず、解脱とは汝如きの心情を指すものに非ず汝迷へる者よ、さめよ、さめよ、とくさめてこの清淨無垢なる胡蝶の歌をきけ。

「蝶々、蝶々、菜の葉に止まれ
菜の葉にあいたら、櫻に止まれ」

と、如何にうの調の靜にして、何ぞその想の氣高き!!、來れ、罪を自覺せざるものよ、來りてこの靜なる調の強き痛罵をきけ。來れ、正義に誇る者よ、來りて此の崇高き想の尊き訓戒に打たれよ。來れ增上慢の輩よ、かつて一度も己を顧みず曾て一度も過去の業障を追懷せざる汝增上慢の輩よ、來つて此の小さき如來使の法を說くをきけ。來れよ、さめよ。今さめずんばいつの折か再び佛道に入るを得べき、地獄は脚下眼前に横はりて汝等の來るを紅蓮白蓮の業火を準備せるぞ。さめよ、醒めよ。汝正義に誇る者よ、汝博愛を衒ふ者よ、汝增上慢の輩よ。とくさめて汝の罪と汝の穢とを佛前に發露せよ

更に吾をして唯物論者を罵り、更に吾をして樂天主義者を戒め、更に吾をして道學者流を嗤笑はしめよ。彼等は凡て宗教の存在を否み、彼等は凡て靈の大なる勢力を蔑視するものなり、物のみを以て世界を說明せんとし、現世のみによりて行動を規定せんとし、考察のみによりて眞理に到達せんとする者なり、靈魂のある事を忘れ、三世の存する事を誤り、罪障を認めず、佛陀を認めず、一の反省をも、一の懺悔をも有せずして、唯漫に頑固潛越の獨斷を恣にせる者なり。

來れ、迷へる者よ。來れ、唯物を說き樂天を語る迷へる者よ。汝達もし眞面目に自己を考察して而も尙心靈の存在を認

む、能はずんば、如何にしてかよく分秒と雖も此の如き社會に生存し得べしとなす哉、汝達もし眞面目に生後の生涯を考察して而も尚三世を認めず佛陀を認め得ずんば、果してよく發狂を止め得べしとなすか。未來に希望を有せず、現世に正道を踏まずして而も佛を否み慈悲を拒く、汝は如何にしてかよく眞面目に社會に生存し、如何にしてよく眞面目に正義を保ち得べしとなすか。汝自己の力のみによりて眞理に到達せんとするものよ、汝は世に人力の及ばざる幾多事物の存在することを忘れ、汝は世に想像の達せざる幾多大不思儀の活動せる事を知らざるか。何ぞ而く汝の慢心を增長せしざる前に暫く禪定に入りて、先づ自己の智力と世界の幽玄とに思をこらさゝる。眞に尊崇すべきものを信ぜずして之に螳螂の斧を向くるは、其の理を知らず其の力を解せずして而も唯ひたすらに之を信奉する者よりも遙に愚なる事を知らざるか。乞食の子に帝王の榮華を語るとも如何にして之を了得するを得ん、僅に一枚の紙をすら透見し得ざる愚、る凡夫の卑賤を以て、かしこくも大覺世尊の尊嚴を窺ひ奉らんとす、無禮も亦甚しからずや。汝の力むべきは徒に眞理を究め漫に佛陀を尋ねんとする無禮の態度に非ずして、自己の罪障と自己の卑賤とを自覺し懺悔して、泣いて佛前に過去幾億萬劫の重障謗法の罪を至誠發露し奉るにあるなり。來れ、汝迷へる者よ、來れ、唯物を語り樂天を說き道學を誇張する汝迷へる者よ、とく來りて吾が罪に泣き、罪に苦み罪を脫し得たる過去懺悔の追懷をきけ。

* * * * * * *

餅を知る者は餅屋なり、罪を知り罪を脫せんとするものは罪人に非ずして何ぞや。凡夫あるが故に佛在すなり、迷妄あるが故に慈悲存するなり。キリストは云ひぬ、餓渴ごとく義を慕者は福なり、うの人は飽くことを得べければなりと、佛は宣ひぬ、正法を信ぜずんば寧ろ正法を謗れ、二者共に佛道に入る事を得んと、己を省ず、罪を自覺せずして正義に誇り佛道を罵る者程世に不幸なる者は非るべし、彼等は實に石を抱いて寶玉を夢る者なり、彼等は實に罪惡に滿ちたる自己の實相を淸淨と誤る者なり。理に背ける惑見、癡ぞ醒悟せざるを得んや、臨終に際して俄て騷ぐとも何のせんなかるべしさめよさめよ汝達迷へる者！！とくさめよ。且つ若し誤つて尙此の上にも罪を重ぬる事のあらば何とすべき、卿等は幸にして今迄過失少き生涯を過し來ぬ、されどうは實に僥倖のみ、千尋の懸崖を悟らずして闇夜漫に歩みつゝも而も不思儀にも安全なりしのみいついづくに俄に罪に陷らんとも計り難し。危し矣、危し矣。とくさめよ、未だ大罪に穢れず重障に陷らざる內に、とくさめて。救の玉杖にすがれ卿等もし眞に卿等の危嶮と罪障とを自覺せば片時も其の儘に安んじ得ざるべし。吾の如く既に罪惡に陷り汚毒に捕はれ果てなば、もはや悔む

ことも及ばざるか。思へ、如何に吾が苦痛の大に、吾が悶々の激しかりしかを。卿等もし今の吾が容顏に接せば必ずや驚いて面を背けんか、吾とてもかつて一度は紅顏豐色、淸淨の氣と、快活の念とに滿ち滿ちし昔を有てるなり。かばかり容顏の變ずる迄には吾ながらにもうの苦の甚だしかりしを思ふて獨り震へ慄くを禁ずる能はず、曾て罪を毒蛇に譬へし者ありしが、げに執念くつき纏ひ來る毒手の恐ろしさは蛇の怨ともものかは。心せよ。心せよ。一度罪に捕はれなば如何にもがき狂ふとも殆んど逃れ出づべき望なきなり。未だ罪に穢れざる者よ、未だ罪を自覺せざるものよ。さめよ。さめよ。卿等の踵には怨恨を呑み、毒を貯へて魔の蛇の逼れるゞ、卿等の一歩は悉く之れ陷穽の上行く危嶮限りなきものゞ。いつを臨終とも定め難し、機會を再度求むる勿れ速にさめて身を慈悲と惠光との大磐石に置け。

（未完）

日什聖人置文諷誦抄卷上

講師、齡八十老比丘　阪本　日桓　講演
增田　聖道　速記

其十

並ニ二佛塔中一唱フ付囑一有在一文　此の一句十字の中の上の五字は能付囑の人を擧げ下の五字は所付囑の法を擧たる文で有ます偖此の二佛並座の文に就ては法華文句の分科と今の諷誦章の分科とは進退の不同が有ます今の諷誦章の分科は經文の以大音聲普告四衆の下の付囑有在の唱導を明したる文の始に屬して有ます法華文句の分科は十方分身の來集を說きたる經文の末に屬して有ます法華文句の分科は進で上の文に屬し今の諷誦章は退て下の文に屬して有ますけれども是れはたゞ進退の不同のみにて開塔の意味に於ては毫も不同は有ません傳敎大師の秀句の下卷丁廿二に此の二佛並座の經文を牒したるも今の諷誦章と同一にて退て屬して有ます唱二付囑有在一文此の五字は法華經迹門の見寶塔品の長行の經文に以二大音聲一普告二四衆一誰能於二此娑婆國土一廣說二妙法華經一今正是其時如來不レ久當レ入二涅槃一佛欲下以二此妙法華經一付囑有レ在上文此の經文の意を御書になつたので有ます今上に引たる經文を取意して辯じて聽せませう　抑釋尊が法華經迹門の法說譬說因緣說の三周を歷て開權顯實の說法が畢りて一往出世の本懷を達し十界各々差別の人理敎行が唯一佛乘の人理敎行の四一の妙法となりたれば是の上は先化度すべき衆生なければ此の妙法蓮華經の功德利益を滅後に流通せしめんとて付囑有在と詔勅を下されたるで有る是れが經文の大意で有ます偖此の付囑有在の經文に就ては近令有在と申す法門と遠令有在と申す法門と此の二種が有ます其近令有在と申すは觀世音菩薩藥王菩薩等の二萬八萬八十萬億の迹化の舊しく此の娑婆世界に住居した

る菩薩達に一部唯迹門本迹一致の法華經開權顯實の妙法を付囑して近く此の娑婆世界に流通せしめて衆生濟度するを近令有在の法門と申します爰に於て觀世音藥王等の迹化の大士達か南岳天台傳敎大師等と垂迹示現して滅後像法の時代に預て釋尊より付囑を受たる一部唯迹門本迹一致の法華經開權顯實理の一念三千の妙法を弘めたるを近令有在の法門と申すので有ます此の近令の近の字には二の意味が含て有ます一には法華經迹門の淺近の妙法を付囑したるを近令有在と申します是れは所付の法に約して申すので有ます二には近く此の娑婆世界に限て流通せしむるを近令有在と申します是れは流通する國土に約して申すので有ます次に遠令有在と申す法門は本佛の釋尊久遠五百塵點劫の往昔本因妙の御修行遊ばされたる頃より御弟子と成たる本化の上首上行等の四大菩薩を始め下方微塵數の菩薩に一部唯本門本勝迹劣の法華經開迹顯本事の一念三千の妙法と兼て一代所說の聖敎とを併て付囑し近き此娑婆世界は申すに及ばず遠き十方の國々に垂迹示現して時に應じ機に對して流通せしむるを遠令有在と申します爰に於て本化の上首上行大菩薩は佛滅度後末法に入て日蓮と垂迹示現して預て別付囑を受たる一部唯本門本勝迹劣の法華經開迹顯本事の一念三千の妙法を弘めたるを遠令有在と申します此の遠令有在の法門にもまた二の意味を含て居ます一には法華經本門の深遠の妙法を付囑したるを遠令有在と申します是れは所付囑の法に約して遠令と申したので有ます二には近き娑婆世界は無論遠き十方の國土に流通せしむるを遠令と申します是れは流通する國土に約して遠令と申したので有ます此の遠令有在の法門は釋尊が法華經迹門の法席に於て顯露に說きたる法門では有ません天台大師と申す御方が支那の建業の光宅寺と申す寺に於て法華經御講談の時本佛釋尊の密意の本懷を探り起後本門の意を取りて前の迹門の法席に於て後の本門の敎意を明したるので有ます故に大師の御釋に遠令レ有レ在聲徹二下方一此の釋にて遠令有在の事柄が能く分ります舉二六難九易一文此の五字は法華經見寶塔品の偈の文の付囑を頌する中に此の法華經は釋尊一代所說の聖敎の肝心三世十方の諸佛の出世の本懷にして衆生成佛の直道の妙法なるを以て殊更に長々しく此の經を受持讀誦解說書寫する事の難き所以を說て滅後に流通する事を勸奬たる經の文を擧て御書になつたので有ます此の六難九易と申す名目は法華文句及び記の文にも擧て有ません文句の科文の五の卷に六難といふ名目が有ます傳敎大師の秀句の下卷には六難と九易と二ッの名目が書て有ます今の諷誦章は此の二書に依て御書になつたて有ます此の法華經見寶塔品の偈頌の六難九易の經文を取意して辯じて聽せます一には如來の滅後に此の法華經を解說する事の難きを頌する經文の意に云く爾前の四味三敎の他宗所依の諸の方便權敎を解說する事其數恆河沙といへども未だ難し

とするに足らず（是は九易の中の其の一で有ます）如來の滅後惡世の中に於て能く此の眞實の法華經を解說する事は極めて難とす若人ありて高さ十六萬八千由旬の須彌山を接て他方の無數の佛土に擲置事は未だ難とせず（是は九易の中の其の二で有ます）如來の滅後惡世の中に於て能く此の眞實の法華經を解說する事は極めて難とす若人ありて足の指を以て娑婆三千大千世界を動し遠く他方の佛土へ擲捨る事は未だ敢て難とせず（是は九易の中の其の三で有ます）如來の滅後惡世の中に於て能く此の眞實の法華經開迹顯本事の一念三千の妙法を弘めたるを遠令有在と申します此の遠令有在の法門にもまた二の意味を含て居ます一には法華經本門の深遠の妙法を付囑したるを遠令有在と申します是れは所付囑の法に約して遠令と申したので有ます二には近き娑婆世界は無論遠き十方の國土に流通せしむるを遠令と申します是れは流通する國土に約して遠令と申したので有ます此の遠令有在の法門は釋尊が法華經迹門の法席に於て顯露に說きたる法門では有ません天台大師と申す御方が支那の建業の光宅寺と申す寺に於て法華經御講談の時本佛釋尊の密意の本懷を探り起後本門の意を取りて前の迹門の法席に於て後の本門の敎意を明したるので有ます故に大師の御釋に遠令レ有レ在聲徹二下方一此の釋にて遠令有在の事柄が能く分ります舉二六難九易一文此の五字は法華經見寶塔品の偈の文の付囑を頌する中に此の法華經は釋尊一代所說の聖敎の肝心三世十方の諸佛の出世の本懷にして衆生成佛の直道の妙法なるを以て殊更に長々しく此の經を受持讀誦解說書寫する事の難き所以を說て滅後に流通する事を勸奬たる經の文を擧て御書になつたので有ます此の六難九易と申す名目は法華文句及び記の文にも擧て有ません文句の科文の五の卷に六難といふ名目が有ます傳敎大師の秀句の下卷には六難と九易と二ッの名目が書て有ます今の諷誦章は此の二書に依て御書になつたて有ます此の法華經見寶塔品の偈頌の六難九易の經文を取意して辯じて聽せます一には如來の滅後に此の法華經を解說する事の難きを頌する經文の意に云く爾前の四味三敎の他宗所依の諸の方便權敎を解說する事は未だ敢て難とせず（是は九易の中の其の四で有ます）如來の滅後惡世の中に於て能く此の眞實の法華經を解說する事は極めて難とす（是は六難の中の其の一で有ます）二には如來滅後惡世の中に於て自身に於ても書寫し持ち他人を勸奬して書寫し持たしむる事の難き事を頌する經文の意に云く假令人ありて手に虛空を握把て諸の世間に遊行する事も亦未だ敢て難とせず（是は九易の中の其の五で有ます）如來の滅後惡世の中に於て能く此の眞實の法華經を自身にも書寫し持ち他人をも勸めて書寫し持たしむる事は極めて難とす（是は六難の中の其の二で有ます）三には如來の滅後惡世の中に於て此の眞實の法華經を暫も讀誦する事の難き事を頌する經文の意に云く若人ありて大梵天に飛昇事は亦敢て難とせず（是は九易の中の其の六で有ます）如來の滅後惡世の中に於て暫も能く此の眞實の法華經を讀誦する事は極めて難とす（是は六難の中の其の三で有ます）四には如來の滅後惡世の中に於て此の眞實の法華經を自身にも能く受持し且つ他の一人の爲めに說き聞せる事の難きを頌する經文の意に云く假令人ありて此世界の壞れんとする壞劫の時に至り大火に世界を燒るときに極めて乾ける草を擔負て大火の中に入りて草も我身も燒けざる事は未だ敢て難とせず（是は九易の中の其の七で有ます）如來の滅後惡世の中に於て能く此の眞實の法華經を自身にも能く受持し且つ他の一人の爲に說き聞せる事は極めて難とす（是は六難の中の其の四で有ます）五には如來の滅後惡世の中に於て能く此の眞實の法華經を聽聞して其聽聞したる所の經文の義理を能化の敎師に問尋する事の難きを頌する經文の意に云く爾前の四味三敎の他宗所依の方便權敎を說て千萬億無量恆河沙の衆生をして阿羅漢果を得て六神通を具せしむる利益を施す事は亦未だ敢て難とせず（是は九易の中の其の九で有ます）如來の滅後惡世の中に於て若し能く此の眞實の法華經を受持する事は極めて難しとす（是は六難の中の其の五で有ます）六には如來の滅後惡世の中に於て能く此の眞實の法華經を受持する事の難き事を頌する經文の意の云く若人ありて爾前の四味三敎の他宗所依の方便權敎を說て千萬億無量恆河沙の衆生をして阿羅漢果を得て六神通を具せしむる利益を施す事は亦未だ敢て難とせず（是は九易の中の其の八で有ます）如來の滅後惡世の中に於て若し能く此の眞實の法華經を受持する事は極めて難しとす（是は六難の中の其の六で有ます）己上是れが寶塔品の偈頌の六難九易と

申す法門で有ます今の諷誦章に舉二六難九易一と申したるは此の經文の事を御書になつたので有ます偖上に辯じました九易の所作をなす者は通力を得たる佛菩薩の所作か但しは不得通の凡夫の所作かと申すに是れは不得通の凡夫に約して辯ずるが正意で有ます若得通の佛菩薩等の所作ならば易が中の大易にして何にも不思議と申す程の事は有ません不得通の凡夫の所作なればこそ不思議とも申します且又た法華經を受持讀誦解說書寫する事の難事が中の大難事たる義勢も強きが上にも強くなりますから我宗祖大聖人は不得通の者の所作に約して御書になつて有ます開目抄上卷了ウ撰時抄上卷了ウ三十二往見すべし　求末二法導師一文　此の五文字は次上に辯じました六難九易の經文の下に佛滅度後に此の法華經を流通する事を勸奬る經文を講談しまするに三種の分科が有ます其初の分科の經文に諸善男子於二我滅後一誰能受二持讀一誦此經一今於二佛前一自說二誓言一と有ます今の諷誦章に求二末法導師一と申したるは此の經文の意を御書になつたので有ます此經文に於我滅後とありますす此の滅後の語は正像末の三時に通じます特に迹門流通段の寶塔品の經文なれば求二正像導師一と申すべきを求二末法導師一と云て本門の流通段に書きなしたる其所以は我開祖大聖人が本地久成の本佛の本懷多寶如來及び十方分身の諸佛の證明の正意たる起後本門の寶塔に約して御書になつたので有ます此の末法の導師と指したるは正しく本化上行の垂迹我宗祖日蓮大聖人を確に指名したるので有ます故に下の諷誦章に於て本化の四大士を御講談遊ばされたるとき結要傳受之大士末法弘經之導師也と御書になつて有ます是れは之れ天台大師の釋に遠令有レ在聲徹二下方一と申して本佛の釋尊迹門の寶塔品に於て付囑有在と唱へたる聲遠く下方の寂光土に住する本化の大士の耳根に徹り末法の導師たる事を密に御承諾有らせられたりと申す釋の文によつて斯く御書になつたので有ます偖此の寶塔品には三ケの付囑の佛勅が有ます次の提婆品には二ケの鳳詔が有まして惣じて五ケ所の佛勅が有ます此の寶塔品の三ケ所の佛勅の最初の經文に爾時多寶佛於二寶塔中一乃至佛欲下以二此妙法蓮華經一付囑有レ在上文　此の經文が第一の勅宣で有ます次は爾時世尊欲下重宣中此義上乃至今於二佛前一自說二誓言一文　是れが第二の鳳詔で有ます又其次は多寶如來及與二我身一乃至今於二佛前一自說二誓言一文　此が第三の諫勅で有ます其處で此の諷誦章の上の唱二付囑有在一の文は經文の第一の勅宣の文を御書になつたので有ます又下の求二末法導師一の文は經文の第三の諫勅の文を御書になつたので有ます左すれば第二の鳳詔が有ません是れは御文章が二句十字で有るから前後の二ケの佛勅を舉て且く中間の佛勅を省略した迄の事にて別に意味は有ません偖今此の諷誦章には寶塔品より去て神力品に至る迄の十一品の御經を御書になつた仔細は此の十一品の御經は靈山虛空會の儀式にして本地久成の本佛釋尊出

世の本懷を說き顯したる唯以一大事の御經で有ますから唯釋尊一佛の勅宣のみにあらず多寶如來及び十方分身の諸佛同く共に諫曉して滅後末法の流通を勸奬したる殊勝尊重の御經を二句十字の極て僅少の文の中に說き示したる事なれば注目注意して拜見せねばなりません預て前にても辯じて御聞せ申した通り此の諷誦章は文字の數は僅に九百七十九字で有つて此の僅少の文字の中に於て本佛の釋尊所說の一代聖敎の肝心終窮究竟の深法たる法華經本門の開迹顯本の妙義を解釋し本化所弘の三大秘法の奧旨を宣說して以て日蓮門下の修學の人の摸範を定め末代の行者の即身成佛の直道を顯說して門下僧俗の龜鏡に備へ置きたる甚深の妙書なれば予が如きの淺學短識の者剩へ老耄たる齡八十の老比丘の講ずべき書では有ません懇請默止しがたく講場に臨みたるは實に潛越の罪免るゝ地なく赧顏慚悔するのみて有ます

同生同名御書

本多日生師說敎
木村義明筆受

此御書は文永九年四月、佐渡より鎌倉なる四條金吾賴基の女房へ、御遣しに成た御文章でありまして、先づ最初に「藤四郎殿の女房と常によりあひて御覽あるべく候」とあり、主として婦人に對する御敎訓であります。

「大闇をば日輪やぶる、女人の心は大闇の如し法華經は日輪の如し」と、

闇とは如何なものであらふか、明るいとは如何なものであらうか、特に心の闇とは如何なものであらうか。前回にも申上た通り凡そ世の中に闇ほど不自由なものはなく、又た闇ほど恐いものは御座いません、眞の闇夜には一寸先きも見へない尤も平素自分の通りつけて居る慣れた路ならば、如何にか、斯にか、足數位で方角を定め、見當を付けますが、始て知らない處を行くとして御覽なさい、一足でも進めたものではありません。曾て拙者は旅をしたことがあります、頃は恰ど今頃で、梅雨の氣節でありましたから、毎日雨は降る、道路は非常に惡し、是から山を一つ越へて、一里程行けば、或町の旅館へ着くので、落着先は決て居るから隨分急速だのでしたが、何分雨は降る、道路の惡い爲めに、恰ど一里程手前の山の上で、日はドップリと暮れてしまつた、サア大事件だと思ふて、愈急いだが、愈歩けない、又た其夜の闇さと云たら非常なもので、所謂る五月闇である、雨は增〳〵烈くなる、風さへ加ッて、素より提灯もないことであるから、一寸先も見へす、泥に滑る、臂餅を搗く、近邊に人家はなし、急ぐにも足を進めるに由なくして、五丁計りの山阪を下るにさへ凡う一時間餘もかゝり、漸く田市へ出れば右は川左は水田で座の

烈しいこと、殆んど吹飛されぬ計り、若し一歩足を過てば川の中か泥田の中へ轉覆ると云ふ樣な譯て、杖を力に漸く人家の在る所迄來て尋れば、忌〳〵しくあるまいことか、飛てもない方角を間違つて、道の一里餘も損をしたと云ふ始末、實に此時程心持の惡いことはありませんでした、自分ながら悔しさと、悲さとが、ムラッ〳〵ッと一所に涌て來て、泣くにも泣れない程でした、けれども仕方がない、その邊は山里で宿屋はなし、泊て呉れる家もあらず、平身低頭して、古提灯を借受け、蠟燭一本を求め、道を敎て貰ふて、やう〳〵のことて町へ出た、其間泥路へ轉覆だこと十數回、宿屋へ着たのが十一時頃、時も時、時刻も時刻、泥だらけの身体を持て行たものだから、宿屋の亭主も、女中共も、驚いたと云ふよりは、寧ろ怪訝な顏をして、拙者の顏を見つむる計り、いらッしやいと云ふ語も出ない、イヤ實に拙者は、後にも、先にもこんな馬鹿な目に遭たことはありません、今から考へると、實に馬鹿々々しいのてあります、が、是が何の爲めてあるかと云ふと、五月闇と云ふ眞黑闇の爲めに、こんな目に遭されたのて、拙者は實に闇には懲り〳〵しました、皆さん何と考へます、此時こんな闇てなく、せめて星の光ても在たならば、拙者は此樣に道に迷ひはしますまい、此樣に泥まぶれになりはしますまい、此樣に時間は取られますまい此樣に困難はしますまい。實に闇は凡ての迷の根源てあります、凡ての困難の發源地てあります。此迷の根源・困難の發源地たる闇が、吾々の心の中に在るとしたならば、如何てありませう、吾々の心が五月闇の樣て、物の白黑も別ぬものとしたならば如何てありませう。世の中の道理に踏み迷ふのも無理てはありますまい、自然と困難に陷るのも順序てあります。吾々は少しも道理を踏み迷はずに行けるてせうか、今迄一遍も踏み過たことはないてせうか、吾々は自ら困難の穴を堀て、自ら陷たことはないてせうか、考へて來ると實に疑懼の念に堪へません、吾々の心は全く闇てす。

モー一つ闇の恐いことを申しませうか。世の人々が此闇夜を利用して爲る仕事は、如何なことが多いてせうか、徒事が多いてせうか眞面目な事が多いてせうか。イヤ殺人、竊盜、姦淫等凡ての惡事、大罪は悉く此の闇夜を利用して遂行るてはありせんか、百鬼夜行と云ふ世の諺があります。闇は惡魔の栖家で、魑魅魍魎は闇夜を世界と致します、吾々の妄想妄念は闇より生れます、闇は人間と罪惡との媒介を致します。皆さんは「夜の東京」と云ふ書物を讀だことがありますか、あらゆる罪と穢とを以て覆れてあります、當に東京計てはありません、全國到る處罪と穢とに埋れて居ます、當に日本計てありません、世界到る處凡そ人間の栖て居る處ならは、夜は悉く罪惡の世界と化して居ます、夜は實に神も佛もないのてあります。

斯樣に世界の闇の中に生ずる出來事、凡ての罪惡は、皆な吾々の心の中より發生する罪惡てはありませんか、吾々の心の闇は如何位うの度が強いのてありませうか。皆さんは各々に自分の心を能く觀察して見たならば、自分ながら其恐しさに呆れるてありませう、誠や佛敎にて煩惱の根本は無明てあると敎るのは眞實てあります。吾々の心は無明、即ち一點の光明をも有たない眞の闇てあるからして、種々の煩惱業障と云ふ惡魔が競ひ起るのてあります、語を換へて申せば無明とは煩惱業障の塊りてある、罪惡の結晶てある、惡魔の母てある。此の惡魔の母、罪惡の結晶たる無明は、吾々の心の中に本來天性として具つて居る、人間の根生と成て居るのてある。吾々の心は此の無明と良心との二面を具へて居て兩方共に常に正反對の行動を取る、此の二つは非常に仲が惡くて、而も双方共極端主義てあるから、何か一の事件があると、此の二つは心の中に於て衝突をする、爭ひか起る戰が始まる詮り力の強ひ方が勝利を占める、良心の力が強ければ無明を壓服する、無明の力が強ければ無明は勝手次第に自儘を始める。而し又兩方共同盟國があつて各助太刀をする、無明の同盟は惡魔である、良心の同盟は佛性である、此に於て無明良心の勝敗は同盟心の實力如何に大關係がある、惡魔の實力勝れば無明の勝となり、佛性の實力強ければ良心の勝となる、此に於て同盟心の修養實力發達の必要を感じて來る。

底て人間は前途に光明も持ち、身と心とに於て平和安慰を得んとするには、如何しても良心に勝て貰はなければならない良心に勝て貰ふには、同盟心たる佛性の實力をして豐富ならしめなければならない、佛性の實力を豐富ならしめるには、佛性の開發修養に努めなければならない、佛性の開發修養は宗敎心の發動に起因す、宗敎心の發動とは信仰の發動てある信仰の發動とは佛の實在、慈悲、救濟を信せんと欲するのてある、之を求めんと欲するものてある、之を信ずること愈深く之を求むること益切にして「自ら身命を惜まざるに」至る、「自ら身命をも惜まざるに」に至つて「常に靈鷲山に在ます」佛は我等の眼前に出て、「無上の妙法を說く」、此に於て我等は「近しと雖も見へざらしむ」と云はれた佛を見奉つることを得る、但し此は肉眼で見るにあらずして、心の眼で見るのてある、即ち心の感覺て精神的の實驗てある、我等の信仰と佛の慈悲とは、此時に於て相感じ、相應じて、正に一体を爲す、斯くして我等は慈悲の手に敎れたりと云ふ此の時に佛の實在を經驗し、慈悲を經驗し、救濟を經驗し、未來成佛の必然を豫想することを得る、一道の靈光此時始めて燦然として發するを認むべく、眞の安心慰藉は此時始て得らるべし人は此時に於て一分の佛てある我等は始て平和安穩なり、我等の佛性は此時限り無き光明を發し、我等の煩惱、惡魔、無明は容ちを潛むるのてある、我等が心の闇黑は此に全く破ら

れる、「生死の長夜を照す大燈明」、「元品の無明を斷る大利劍なり」と宗祖の仰せられたのは實に此てある、我等の煩惱は其儘菩提心に化けたのてある、此菩提心が膨張し、發達して來ると、慈悲、善根の作動を爲す、是れ即ち佛ではあるまいか、我等の心は此時光明に充ちて、人間の目的は全く達せられたと云ふものである。扨て此等て話のくゝりを付て來なければなるまいが、要するに信仰は凡ての根本である、佛果に到るの道である、宗敎の生命である、宗敎心とは慈悲心を含み、正義を含み、道理を含むものである、故に宗敎心は即ち佛性である、佛性は光明である、吾々の心に此光明の顯れるは闇の心を打破たことである、吾々は法華經を信ずることに依て此光明を顯すことが出來たとすれば、此光明は法華經から來たのではあるまいか、法華經の敎が吾々の心を照すと其の反射作用として吾々の心に佛性が顯れたのであらふ、果して然であれば、法華經は大陽の如きもので、道光一閃直ちに吾々の心の大闇を破たのてある、如何云ふ風に心の大闇を破つたか、

反省せよ！、反省せよ！、汝の罪惡を反省せよ、懺悔せよ！、懺悔せよ！、汝の妄想を懺悔せよ、汝は汝の業障を悔ひざるか、汝は汝の墮落を省みざるか、氣を付けよ、注意せよ、惡魔は汝を窺へり、汝若し此上にも墮落せば汝は再び浮び出るの機なけん、汝は尊き佛の御子にあらずや、汝の親佛は常に汝の保護を怠らず、汝の生長進歩を念ふて止まず、オ、今汝は汝の親の言を聞かざるか、「我子よ汝は汝の良心を持てよ、良心は汝の寶なり、今若し汝の寶を持つことを得ば、我は更により大なる寶を與へんと、あゝ汝の親は慈悲甚大なり、眞に能く汝を愛す、汝尙ほ覺らざるか。

是れ法華經の感化を受けたる吾々が心の奥深き處に於ける小さく幽かな囁きではあるまいか、此囁は確かに心の奥に住む佛性の口から發する言てある、菩提心の聲てある、此が心の闇を衝て出た光明てある、即ち法華經の力に依て心の大闇を破られたのだ、法華經は大陽の如しだ。底て同じ人間の中でも男は心の闇を破ることがイザとなれば速いが、困るのは女てある、女の心は至つて愚痴てある、道理に暗く條理は少もなく、論理甚だ不確實で、而かも牽强附會てある、おまけに執拗で邪推深い、さうかと思へば早く氣の變ることは、まるで猫の目か秋の空の如てある、意志も弱く、智力も薄いので、感情一方の動物てある、夫てあるから男の智惠を借りない女の爲ることは能く事を仕損ずる、尤も中に男勝りの女もあるけれど、夫は希てある、若し妄想、煩惱即ち心の惡い作用を闇に喩へるならば、男の心は普通の闇て女の心は大闇てある、其代り女は感情に强處よりして慈悲深く愛情多くして宗敎には入り安い、一旦宗敎に入れば、持前の執拗か夫へ付くからして。信仰は中々堅い、此信仰よりして彼等の心を

清め、煩惱を悉く拭い去て、一旦清淨無垢の者とならしめ、夫から彼等持前の慈悲心、及び愛情の精神を利用すれば、夫こそ實に天女の如く、菩薩の如きものが出來る、即ち宗敎に就ては女は一般に天才てある、女は宗敎を以て敎ふるのが唯一の方法てある、普通の敎育や何にかでは兎ても女の心の大闇は破れないが、宗敎ならば直ちに破れる、日蓮上人は常に其處に御注意があつた、故に女人に對する御敎訓は常に優くして、而かも丁寧懇篤てある、而して女人特有の感情を利用して御敎導されてある、今の御文章にしても直ちに「幼子は母をしらず、母は幼子をわすれず、釋迦佛は母の如し、女人は幼子の如し云云」と、斯樣に仰せに成て、女人と佛との關係を御說明に成て居ります。

何れにしても吾々の心は無始以來大闇に閉ぢ込められて居るのてあります、然しながら幸に吾々の前には法華經の日輪が顯れて居ります、吾々は照されて居ります、今現に反射作用を起して吾々の心より光明を發し、大闇を打破らんとして居ります、吾々は益此光明を增發なければなりませぬ、南無釋迦牟尼佛、願くは成等が菩提心を保護あらせ給へ、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、

蜷川菊地兩氏合著日蓮聖人傳に就て

醉蝶

世に下受負と云ふ事あり、其の弊風蕩々乎として、遂に我が著作界に迄も及んで、誠に筆を取る者は二流三流、否五六流以下の弱輩青二才に過ぎずして、所謂名士大家なる者は、空しく並大名の虛位に甘んずるに至りぬ、豈慨嘆の極みに非ずや。日蓮上人傳の如きも亦實に其の一なり。余輩は未だ蜷川の名を大家の内に見出さず、龍夫の名を二流三流の内にすらも發見し得ずと雖も、而も彼が近來多々益々著述を亂發する所以によりて、その看板とせられ易き可能性を認めむと欲する者なり。

うは兎も角も、聖人傳は確に五六流以下の淺學、青二才の筆とすらも思へぬ程の拙きものなり。苟も書を公にせんとの勇氣と自信とを有てる人の筆なりと、會得し難き迄の價値少きものなり。全然眞實傳等のやきなほしにすぎずして、何等の創始をも何等の理想をも有せず、余輩は何故に此の如き著作の現れ來りしやを疑ひ、余輩は出版界現時の墮落弊風に慨嘆措く能はず、余輩は而く我が日蓮上人を商品扱にせられたる無禮の態度に向つて、大に怒らざるを得ざる者なり。されば、まて、怒るは易く、忍ぶは難し。漫に怒り、漫に裏面を

窺ふべからず。余輩は強て菊地某の裏面暗黒の方面を避けつゝ、單に彼が上人を世に紹介し、單に彼が上人を世に讃嘆せし、光明功蹟の半面にのみ思を走せて、假に田舍爺父となりすましつゝ、少しく彼の識見の淺薄皮想に流れたるを指摘するあらんか。

著者は我が日蓮上人を以て時代の產物なりとし、我が日蓮上人を以て覇氣滿々たる風雲兒なりとして、遂に上人の理想と、上人の覺悟と、上人の熱と血と涙とに想到する事なく、又著者は淺薄皮想なる眞實傳等の失をうけて、之に所謂明治式の對上人眼を以てせしにすぎずして、泝りて遠く鷲峯の昔に上人出生の根源を索ぬるにもあらず、求めて深く上人の發願と、上人の健闘と、上人の迫害との内に一大理想と、一大覺悟と、一大熱血との注流せるを認むるにもあらずして、著者は遭難によりて益々堅められたる上人の自信と、退隱に就いて更に企てられたる上人の準備とにも遂に相到する能はざりき。宜なる哉、著者の上人を見るや、皮想賤見嗤ふに絶ゑたるもの甚だ多くして、或は上人の出生を書き、或は上人の得道を述べ、或は上人の遊學を傳ふるに當りても、ろこに上人の生み出され、上人の完成せられし所以の、決して過然に非ざりしことを、我が當時の佛敎と、我が法華經の妙旨とに對比して、深奥痛刻に書く事能はず、又或は上人の開宗を述べ、或は上人の諫曉を傳へ、或は上人の佐渡を書くに當りても、ろこに上人の誓願と、上人の理想と、上人の信念との活躍たる所以を、藏經全部の脉絡と、法華壽量の妙訓とに對應して適當熱烈に書く事能はずして、爲に聖人傳全部と、著者數月の勞力とは全く水泡に歸し去りつ。惜い哉、吾人は遂に眞實傳以上の產物に接する能はざりしなり、あゝ。

前には五郎高橋氏日蓮論を作りて大に我が上人を傷けんと企てしも、遂に深密傳以上に出て得ずして、空しく金山の慨を殘しつ、今又松堂菊地氏聖人傳を現はして、大に我が聖人を謗はんと欲せしかども、遂に眞實傳以外に達し得ずして、轉た蛇足の嗤笑を殘しぬ。何すれぞそれ我が明治文壇の萎微として、而く衰へし事の甚しき。余輩は今二氏の失敗に際會して轉た現代の敎界と、現時の文壇との爲に一掬の涙を禁め得ず、謹んで玆に我が上人を傳せし最近二駄著述の末路を葬はんと欲する者なり。

然り而して心私に二氏失敗の起因を尋ぬるに、二氏は共に我が日蓮上人を見るに當りて、皮想の惑見にのみ坐し、外部の虛影にのみ驚いて、誠に上人の眞精神と、上人の眞理想とを汲む能はざりしなりき。高橋氏は曰く「日蓮大士然り、寔に非凡の天才は日蓮をして四面皆楚歌なる中に在て、遂に聲鼓鼓々群敵を鳴潰し、早くも轟然凱歌を奏せしめたるなりき」と、菊池氏は云へり「日蓮は我が佛敎史上に活躍する唯一の奇傑なり。覇氣滿々たる渠が一生は實に奮闘的生涯にして、その宗

敎的覇業は、吾人をして痛絶快絶を叫ばしむ」と、以て二氏の見解が單に我が上人を一世の豪傑、敎界の秀吉となせしのみに止りて、未だ上人が末法法華弘通の大導師としての自覺に到らず、未だ上人が能滅衆生闇の如來使としての大慈悲に達し得ざりしを見るべく、かくて二氏共に我が上人の背後に燦爛たる法華開顯の妙理の輝けるを認めず、我が上人の一生に潑溂たる佛敎統一の大豫言の貫けるに想到し得ざりしならんか。あはれ二氏或は上人を打たんとして、而も上人を捉ふる能はず、或は上人を拜せんとして、而も上人に接し得ざりしなり。

然り、二氏遂に實には我が聖人に近づき得ざりしと雖ども若し二氏にして活動のみより上人を眺めず、健闘のみより上人を窺はずして、ろの消息に現れし上人の如何にやさしき人格なりしか、その延山に於ける上人のいかに聖き淸僧なりしかを想ふと共に更に上人をして彼が如き勇氣と、彼が如き怒號と、彼が如き健闘とを敢てせしめし所以のものを究盡せんと企てしならんには、或は尙少しく上人の眞生涯に近づき得たらんか。世人多くは我が上人の本來は靜穩の人なりし事を忘れ、我が上人の實際は着實の學者なりし事を知らずして、唯に上人の怒號と、上人の痛罵と、上人の熱血とに驚くが故に、遂に上人の信仰を認めず、遂に法華の妙典に達し得ざるなり。若し夫れ上人の幼時と、上人の遊學と、乃至上人の身延との、いかに平穩靜和にして、學究思索に耽りしかを思ふて、而もこの同じ上人が或は淸澄に立宗を誓ひ、或は鎌倉に力闘を敢てし、或は佐度に積雪を忍びし由來を想はゞ、必ずやろこに一大疑問を生ずべく、必ずやそこに一大解決を叫ぶならんか。此の疑問と、此の解決とこそ、誠に吾人をして上人に導き、誠に吾人をして上人に接せしむる唯一無二の坦道にして、人もし上人の熱誠と、上人の勇氣と、上人の健闘との裏面に深く〳〵辿り入りつゝ、遂に法華壽量の妙典と、末法弘通の佛敎と、佛敎統一の大理想とに想倒し得たらんには、そこに初めて誠の上人に謁し、ろこに初めて誠の上人に服し得べきなり焉。

或は釋迦と耶蘇とを比照して、之を寂靜と活動との兩面に分ち、定惠と健闘との二種に眺むるものあり。說の當否は暫く措くも、我が日蓮上人の一生は、實に此の二大偉人の兩面の美德を、並せ保てるものにして、其の長き健闘と、激しき迫害とは、一面上人の父母兩親に對するやさしき孝心と、弟子檀越に對するやさしき慈愛の光に照されて、層一層その光彩を大にし、又其の深き敎理と、强き信念とは、一面當時佛敎界の墮落混亂と、爾後日蓮末流の活氣熱血の衣裝に飾られて、層一層ろの美麗を勝れしめつゝ、こゝに古今獨步の一大敎祖と、一大敎團とを建設するに至りぬ。誠や、法華附囑の識言は上人降誕の先驅とも云つべく、什門爾後の健闘は上人

滅後の殿軍とも稱すべきか。經を見るに序分と流通との捨つ可からざるが如く、我が上人を窺ふにも、又法華と教團とを捨て得ざるなり。惜しい哉、高橋氏、菊池氏、共に等しくこゝに思ひ到らずして、遂に失敗をなむるに至りし事よ、吁々。

願はくは高橋五郎君足下!! 願はくは菊池松堂君足下!! 願はくは足下等、今茲に一度企てし研究を中途に廢するならして、更に深く上人を究め、更に深く法華を尋ねて、窠むらくは泣いて上人の感化に打たれん事を。我が苦言を許せ。

來狀集

其二　林日法老人より

前略、此の度本多御聖人樣には愈々管長御當選の由拜承、歡喜余念なく、日夜佛恩の有難きに感泣罷在候。尙喜の余り狂詩有之、御目にかくる程のものならずとわざと差控へ申候、愚老は益壯健、此の頃は大夏帽子に、二本杖にて、徒歩にて日々三四軒の信者を訪問仕り、根限り信仰をすゝめ居申候。山本近尼御前も殊の外の御熱心、常に涙ぐましての御演說遊ばし候。山形保女大喜、日夜心配罷在候處妙法之功力ゝや、道々と輕快に相向ひ申候、何卒御親切の御見舞狀賜り度、此の折につけても尙更に、信心增進仕候樣、くれ〳〵も御すゝめの御書狀遊ばし度候。後略。

（前號に漏しき龍女さして掲けし山形保子よりのを其一とす）

日蓮論批論に就て

醉蝶

小倉道敏君足下！　足下初陣なりと聞くものから、けちをつけ參らするに忍びずと雖も、聊か苦言を連ぬる所以のものは、足下の才と、足下の熱とを惜んで、足下に充分の發達を希望する老婆心に外ならざるなり、乞ふ我無遠慮を咎めざれ。足下が文壇の賊五郎を斬るべく憤慨の軍を起したるは大に可し矣。日蓮論の如き無禮極りなき著述と、日蓮論の如き亂暴限りなき暴言とに對しては、苟も日蓮上人の流を汲み、日蓮上人の熱血を承くる者、誰か憤怒せざらんや、余輩は足下の活氣と、足下の熱情とに對つて大に贊成の意を表する者なり。唯惜むらくは足下が好き敵を撰ばず、初陣の功名を更に裝飾するならして自ら其識見を下し、自ら其尊嚴を恥かしめて、士君子らしからぬ筆をとり、若武者らしからぬ働振をなしたる事にして、足下が信仰と、足下が熱血とは遂に足下を驅りてこの粗暴の態度を敢てせしめしならんと雖も、余輩は足下を初陣とさくものから層一層足下の爲に惜まざるを得ざるなり。或は足下の筆が皮想に走せて深遠なる上人の理想に及ばず、或は足下の劒が支末に振はれて肝要なる上人の信仰を護らざりしが如きは、元より相手あしき爲の不運ならんと、余輩亦多くを語らざるべし。乞ふ鋭き筆と鋭き才とを有てる小倉道敏君足下！　教界今日の弛廢は實に足下を待つ事切なり、乞ふ益々修養に力めんことを。至囑々々。

雜報

▲管長就職式　本多大僧正の管長就職披露式は、去月二十五日品川妙國寺中宗務廳に於て、盛大に執行せられたり、參列者は宗務廳職員は勿論、東京市內郡部各寺院住職及信徒の主なるもの約六拾餘名にして、午前十時より本堂に於て、莊嚴なる儀式を以て、三寶を供養し、就職を披露せられたり、正午十二時より、大廣間に於て、大宴會を催し、山根僧都は寺院住職を代表して、起ちて祝賀の詞を呈し、信徒小島傳次郎氏は信徒一般を代表して賀辭を述べ、最後に管長本多大僧正は夫々答辭を述べられ、かくて各自歡を盡し萬歲を唱へて散會せしは午後正に四時頃なりし、因に當日本多大僧正が三寶に奉呈せられし慶讚文は本誌の卷頭に掲げたれば是を省き、たゞ本宗評議員五名より、本多師に呈上したるものを得たれば此に紹介せん、

祝詞

格言問題は明治の教界に於ける壯擧にして、宗號公稱は法統の嫡庶を明にせる聖業なり。吾門の緇素誰か歡喜せざらんや。然り而して此壯擧と聖業とを決行したるは實に本日を以て管長就職の式を擧げらるゝ日生猊下の苦辛經營與りて大なりしは自他の悉知する所なり。今や東亞の局面一大發展を齎らし、妙法の傳弘正に此時に在り、先づ日東の國土に起りて寰地に字內に及び、洽く冥衆をして轉迷開悟せしめんとす。此時此際に膺り、日生猊下の就職を見る、宗家の幸慶何者か之に過きん。吾曹眞に手の舞ひ足の蹈む所を知らざるなり。聊か菲辭を連ねて祝詞とす焉。

明治三十八年五月二十五日

顯本法華宗評議員
大僧正　錦織日航
僧都　横溝日棄
僧都　山岡會俊
僧都　鈴木障學
僧都　山根顯道

▲管長猊下御親教の狀況　今般本多管長猊下の一行は豫定の如く、六月一日より二府六縣下へ戰時布教として御巡回、六月二、三の兩日は姫路市妙立寺に御親教あり、同地は猊下の御鄕里にて、殊に本年は御養父たる妙善寺第二十一世了妙院日境上人の二十五年忌に相當するにより、二日午後二時より妙立寺に於て親しく境師の法會、並に御師範本致院日昌上人の法會と兼て仝寺の修堂法要、別座施餓鬼會を修せられ、右終て先づ大阪より來姫の淸瀨僧正の說教、次て猊下の御親教あり、滿堂の緇素は法會に於ける猊下が師父兩上人への告文を朗讀せられたる際と御親教とを傾聽して、坐ろに今昔の感を催ほし一同深く隨喜の感涙に咽びぬ

三日は降雨なりしに早朝より師團及び豫備院へ野口淸瀨兩僧正及び妙立寺總代中村彌之祐三宅桔梗等を隨へ御慰問ありて法華經一部宛寄贈せられ、右終て留守師團長柴野中將山本院長と御會談、同日午後二時より妙立寺に於て戰死者追吊會あり、師團長、參謀長其他將卒、市吏員、各宗僧侶、並に遺族參拜、右終て直に猊下と野口僧正の戰時講話あり、降雨なりしも頗る盛會なりき

四日備前國和氣町本成寺に於て戰死者追吊會に臨まれ午後二時より開會、和氣郡內戰死者八十三名あり當日出席遺族二十八名、郡長、町長等參拜、猊下並に野口僧正の戰時講話あり終て仝寺境內に征露戰役に於ける和氣郡出征軍人忠勇紀念樹として、楠木を猊下に御手植の義を同寺檀徒より請願せるにより

り、本堂の前に地を相して御手植あり、同夜は同寺淑女講の懇請により、猊下野口僧正梶木隨行員の說教ありき
五日岡山市本行寺に御巡教、同日午前十一時より國禱會御親修、同夜七時三十分より戰時講話を同寺に公會、寺主能仁師會主として「開會のことば」を述へ、猊下野口僧正及び隨行員の講話あり、參聽者は降雨を物ともせず開會前より聽衆滿堂終始靜聽せしとは殊勝に覺ゑたり、聽衆の重なるものは官公署吏員、第六高等學校、師範學校、縣立中學、關西中學、商業學校、工業學校の職員にして、殊にこれ等學校の學生が制服を着けて數百名列席せしとは大に人目を引けり、因に云ふ同地のこれ等學生は岡山學生淸話會なるものを組織し、能仁師に就きて毎月二回日蓮上人の敎義を講究しつゝあり、今現會員の數を聞くに師範生八十四名、縣中生十二名、關中生三名にて、尙ほ續々增加すべしといふ、彼の姫路妙立寺に師範學生が寺主野老師の講話を聽くものあり、關西の地敎効甚大なると實に喜ぶべき現象ならずや
六日同寺にて午後一時より戰死者追吊音樂法會あり、終て講話、同夜は前夜に引續き戰時講話の公會あり、師範生バヰオリンを奏して會を莊嚴せり、此日晴天晝夜共大盛會なりき、又本行寺にて征露紀念樹として松楠の御手植を猊下に請ひしかば之れを納れらる
七日八日は廣島、夫より呉に出て鎭守府慰問、津山を經て鳥取に入り、松崎を經て境港より舞鶴軍港に航し鎭守府を訪ひ、大阪に出て堺を經て一旦京都に御歸着の上、管長就職式を本山に擧げられ、次て六月下旬より福井石川兩縣下に御親敎の豫定なり　（六月六日岡山にて隨行員報）
尙左に巡敎日割豫定表を揭げん

巡敎日割

六月一日　京都　二日　姫路　四日　和氣
五日　岡山　七日　廣島　十日　岡山
十一日　津山　十三日　鳥取　十六日　松崎
十九日　舞鶴　廿日　大阪　廿二日　堺
廿五日　京都　廿七日　今庄　廿九日　南居
三十日　山内　七月二日　福井　三日　金澤
但し多少の變更あるやも知れず

▲先更會　同會は去月廿八日池の端妙顯寺に於て講演會を開きたるが本多日生師は先回よりの引つゞき講題日蓮上人の宗義及系統の中佛陀論に入りて講せられ其大旨は載せて本號にあり尙同會は會員の多數が學年試驗に遭遇する事故今回を以て一先つ講演會を中止し來る九月改めて又開會する事になし當日講演了りて後講師に感謝の意を表する爲に古定賢正氏は會員を代表して立ちて日蓮上人の敎義的研鑽に就て講師が熱心を以て毎會出席せられしを謝し尙此講演に於て新たなる認識を與へたるは日蓮上人の佛陀論が釋迦牟尼佛三身論にあることを道破せられたること是なりといひ尙講師が主唱にかゝる人格實在論は將に來らんとする本尊論の中心敎義たるものならんと斷じ最後に會員一同講師に敬意を表して散會せり
▲左の記事は姫路鷺城新聞に揭けたるもの以て管長猊下巡廻の盛況を知るべし既記の如く去る三日午後一時より、當市上寺町顯本法華宗妙立寺に於て、當市在住の將校下士卒戰死者約七十餘名の靈位を集めて同宗の管長本多日生大僧正の導師の下に、嚴かなる追吊式を擧げられたり、參列の主なるものは當留守第十師團長柴野中將、同參謀長小原大佐、上村市會議長、熊谷市參事會員、大野市會議員、新聞社員、戰死者の遺族其他信徒約三百名にして、同三時式を終へて、小憩の後午後四時より、管長本多大僧正の戰時に關する約二時間に亘る講話ありて、頗る感動を與へられたり。來賓には茶菓を饗し遺族一同へは折詰の菓子を配布して、全く閉會を告げしは同六時頃なりき、當日は境内の裝飾等百事周到にして、些の遺憾なく、又管長の一行は昨四日午前六時五十分發にて、岡山

に向ひ出發せられたり

顯本法華宗 宗務廳布達

訓諭　宗內一般

別紙廣甲第一三三號ヲ以テ宗敎局長ヨリ達セラレ候ニ就テハ各自其意ヲ體シ心得違無之樣注意可有之此段及訓諭候也

明治三十八年六月十日　顯本法華宗管長　本多日生

（別紙）

廣甲第一三三號

日露戰役ニ於ケル戰死者ノ爲メニ建設セル紀念碑ノ碑文等ニシテ往々征露又ハ征露軍士ノ文字ヲ使用セントスル者有之候處右ハ將來ノ國交上意義穩當ナラサルニ付如此文字ヲ碑文ニ記セル紀念碑ノ設立ハ地方長官ニ於テ許可セサル筈ニ相成居候條注意相成度右征露ノ文字ハ獨碑文ノミナラス時局ニ對スル事業ノ名稱等其他永遠ニ傳フヘキモノニ對シテハ凡テ使用セサル方可然殊ニ戰死者ノ法號等ニモ征露何々居士ノ類ヲ授與スルモノ有之哉ニ相聞候處法號ノ如キモ墓標ニ記シ永ク衆目ニ觸ルヘキモノニ付是等ニ對シテモ可成如此文字ヲ使用セラレサル方穩當ト存候條右趣旨派內敎師僧侶ニ對シ貫徹致候樣可然取計ハルヘク爲念此段申入候也

明治三十八年六月八日　內務省宗敎局長斯波淳六郎

顯本法華宗管長本多日生殿

廣告

大崎學報第二要目　六月五日發行

口繪　本林特別敎室、理化博物標本室
研究
○天台華嚴と密敎との關係　清水敎授
○本宗敎育史要　小笠原毅堂
○聖祖傳（承前、支那佛敎概觀）　風間敎授
講演
○日蓮上人の人格　小林文學士
○世界統一の豫言　姉崎文學博士
雜纂
○本宗敎義一斑（祖文類纂、續前）　本間敎頭
○本尊義　觀如透師
○本宗綱要　桓睿智師
思潮
○英詩（日本海の大捷）　I　b
○陣中に於ける宗敎的實驗　八朶生
○隨感隨筆　淸峽生
○鎌倉紀行（承前）　諸同人
○雨の函嶺　天花
彙報
○學林要報　○本會記事　○同人消息其他廣告等
●一部印刷實費十仙郵稅二仙希望者は適宜左記三所に申込まるべし●前金に非ざれば發送せず●第一號代金未納者は此際御送金を乞ふ

發行所　東京府荏原郡大崎日蓮宗大學林同窓會文學部
賣捌所　福島書店
全　麻布飯倉赤羽根橋際　森江書店

泰文社書籍發賣一覽

靈艮閣藏版

日蓮聖人遺文全集

袖珍縮刷○總皮表紙帙造り
金文字入り天地金頗る美本
（三方金は一冊貳圓拾貳錢）

正價 一冊 金貳圓
孰れも小包料拾五錢

上人の遺文は『錄内、錄外』六十五卷『遺文錄』三十卷其他の『別集』數十卷之を總計すれば百卷已上にて洪帙大冊その代償『甘有餘圓』にあらざれば揃へがたし然るを今回其全部を縮刷して一冊の小本と爲し携帶にも便利となり購求するにも前記の大廉價にて得らるゝ樣にし加ふるに目錄索引等周到綿密に行届き校正も嚴重にし全國を巡りて一々御眞筆に照校したる未曾有の出版なり閲讀用はいふも更なりタトヒ讀まざるものにても御本尊寶前に御備用として最適當の良書なり

田中智學居士撰集

妙行正軌

師子王文庫發行

◎日本紙兩面懷中用刷折本
◎經文●組調●禮讃式●回向文●唱歌等信徒必要のもの悉網羅
（一部 十五錢、郵稅 貳錢）

主筆田中智學先生
佛教雜誌
界の大王

妙宗

毎月一回六日發行
文章平易論斷痛快
紙上奇妙案想續出

正價△一部金十五錢（郵稅一錢）△一ヶ年分前金壹圓八十錢
師子王文庫發行誌籍發賣元
京都村上書林 關東代理店 日宗新報社發行誌籍發賣元 靈艮閣藏版一手特約發賣元

一覽

田中智學先生著述

施本用教書

〔割引御注意〕

此書の内容は既に天下の知る所早く十數版を累ねたり

日本國の宗旨 全

相州鎌倉 師子王文庫發行

末法の大導師 全

此書の内容は既に天下の知る所十餘萬部を賣盡したり

兩體 郵稅三冊乞
裁 同封……金二錢
書價 森 一冊三錢五厘 十冊已上割引
共 同 百冊已上三錢 一冊各金四錢
一 送料別に申受

「妙宗」別刊文字布教第一冊

勅語玄義

「妙宗」別刊文字布教第二冊

宗綱提要

「妙宗」別刊文字布教第三冊

世界統一の天業

この三書とも文章は平易にして論述最も痛快有効卓絶なれば如何なる人にても之を讀めば百年の非を知りて靈の救を得んと乞ふ盛に讀み且つ施本せられよ

「文字布教」正……價一冊……金四錢五厘（郵稅金五厘）
施本用の割引は五冊已上一冊金四錢五十冊已上一冊金三錢五厘同百部已上一冊金三錢○送料別……

東京 京橋南傳馬町二ノ六 電話本局二九一番 泰文社

豫告

統一記者古定賢正君著

日蓮上人の研究

第一輯 近刊

▲上製クロース金文字入定價八拾錢▼
▲並製菊版頗美本定價五拾錢▼

右は從來のありふれたる日蓮傳の比にあらず著者が多年心血を注ひで教義的歴史的理想的劇美的立場より上人を研究せられたる結果の發表なり今や日蓮上人の研究は宗教家は言を俟たず學者文人學生の間に多大の興趣を以て企圖されつゝあり本書は上人を眞面目に研究する機運を作らんとして出でたるもの大方の諸賢幸に愛讀を賜へ

殊に本書は五號活字總振假名附にして老幼男女を問はず讀易き書なり

東京市京橋區南傳馬町三丁目五番地
發行所 須原屋
取次所 統一團

御斷り

本號は乾度期日に發行する都合でありましたが表紙を改裝したのと寫眞版の都合とで二日ばかり後れました次號からは乾度期日に發行いたします

編輯局

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢 十二冊前金六十五錢 郵券代用は一割增但五錢切手分可とす
一讀號申込の節は住所姓名を明瞭にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町とし御振り込の事
一本國は納に領收書を發送す但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰毎一行金八錢なり

明治卅八年六月十五日印刷發行

發行人 井村恂也
編輯人 山根顯道
印刷人 鈴木嘩學
印刷所 北澤活版所

東京市淺草區南松山町四十五番地
發行所 統一團

統一